特集Ⅰ第1展示

第1展示への道

高田　順

はじめに

昭和51年5月10日にオープンした秋田県立博物館には三つの展示室がある。その中で第1展示は総合展示とも呼ばれ、あらゆる年令階層の人々に秋田の風土と歴史を概観してもらう展示として喜ばれ、また様々な批判の対象ともなっている。この展示が4年に亘る準備期間においてどのような過程を経て生まれてきたかを記録することは、全国各地に博物館の建設が計画されている昨今の社会情勢から意義あることと考える。

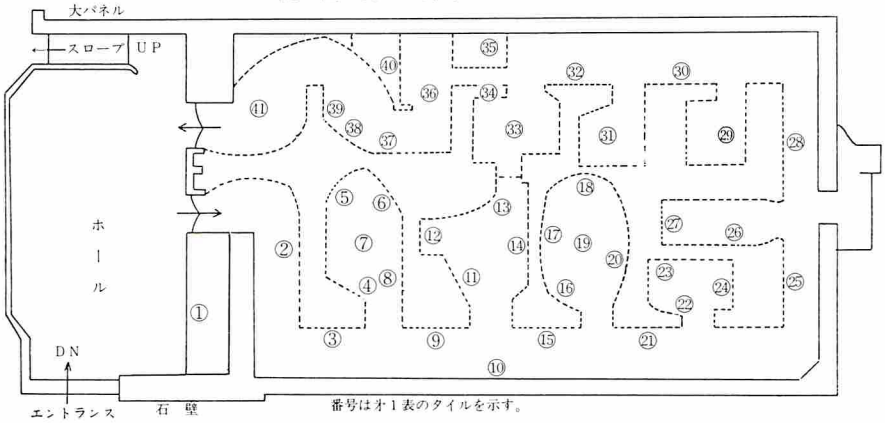
1．第1展示の概要

玄関の正面にグリーン・タフや花こう岩を用いて秋田の基盤を表現する石張りの壁がある。これは地層の状態を模したもので、来館者の視線を最初に受け止めるためのデザイン上からは重要な部分であるが展示の役割は消極的なもので単なる壁としてその意図に気付かれない場合もままある。この石壁と階段に導かれてホールに入る。ホールには第1展示室の入口と出口、第3展示室へ向うスロープがあり、その壁面には「宇宙の中の秋田」を示す大パネルがある。ホールに面した「山から出たクジラ」の展示は第1展示全体の動機付けの展示であり、問題意識をもって中に入るための重要なキーポイントとして作られたものである。（第1図）

第1展示室の広さは約1,000㎡ある。建築側の工事は壁までで、内部の区割や木工事、内装等はすべて展示業者の設計施工によった。室の基本的な形態は外周部分――ジオラマ通りと称する――と、内部の小部屋――ブランチと称する――に分けられる。来館者はジオラマ通りに設定された時代の断面を一通り見ることによって秋田の時の流れを概観することができる。ジオラマ（パノラマやミニチュアと呼ばれるものを含む）とジオラマの間のブランチでは、その時代をもっと細分化したり、その時代の様々なテーマに従った展示がなされている。展示室は基本的に片面展示で、進行方向の右側には展示がない。例外的にここにおかれた年表も積極的に見てもらうのではなく、求められた時のために存在する形をとっている。

館の意図する所はジャンルとしては総合展示であり、来館者にとっては導入展示であり、今後かな

第1図　第1展示室平面図



り長期に亘って固定される展示である。あらゆる人々の要求に応えることを意図して、ブランチごとに色をかえて展示イメージの統一をはかったり、さわれる資料を多くしたり、子どもの目線を大切にして、大人とのコミニュケーションの場を作ったり、遊びやくつろぎの空間を考えるなど色々な配慮が施こされている。展示タイトルは以下の如くである。（第1表）

第1表　第1展示室　　展示タイトル

1	山から出たクジラ（ホール）	⑬	縄文時代	㉘	新田の開発すすむ
2	地球の歴史	14	縄文時代と秋田	29	藩政をささえたもの
③	グリーンタフ活動はじまる	⑮	縄文時代の住いと集落	㉚	村の荒廃
4	日本海の形成と珪化木	16	装　身　具	31	生活と文化
5	デスモスチルスの出現と黒鉱の形成	17	呪　　術	㉜	定期市にぎわう
		18	大湯環状列石	33	新しい時代の動き
6	秋田の深海時代と石油形成	19	葬制の変遷	㉞	近代の群像
7	秋田の地質	20	稲の伝来とその北進	㉟	激動の近代
8	奥羽山脈の形成とひろがる県土	㉑	城柵と開拓	36	秋田の近代化
		22	夷俘の反乱　元慶の乱	37	不景気の波
⑨	秋田に象がいたころ	23	後三年の役	38	戦時下の人びと
⑩	人類の進化	24	くるみ館遺跡	39	変わる秋田
⑪	先土器時代	㉕	戦国時代の城と町	㊵	馬耕から耕うん機へ
12	先土器時代の生活用具とナイフ型石器の分布圏	26	武士の動き	㊶	かけがえのない秋田
		27	中世の宗教文化	○印　ジオラマ、パノラマ	
				□印　ジオラマ通りの展示	

2．展示完成までの流れ

1971年4月に秋田県教育庁社会教育課に博物館準備班が置かれ、1975年5月10日オープンするまでの学芸担当の人員の変遷は以下の如くであった。

1971年　4名　（美術工芸、考古、民俗、生物　各1名）

1972年　6名　（上記の他に　歴史、地質　各1）

1973年　10名　（上記の他に　歴史、工芸、生物、地質　各1）

1974年　14名　（美術・工芸　各1、歴史・考古・民俗・生物・地質・教育普及　各2）

殆どが中・高校からの教師出身者であり、博物館に関係した経験のある者はほぼ皆無に近かった。

所属も社会教育課から文化課の博物館建設係、最終的には博物館開設事務所と2転、3転したが、要綱設置のため最後まで直接のトップマネージメントには決済権がなく、コントロールセンターとしての機能が著しく阻害されたことは全体に大きな影響を与えた。この4年間を展示のサイドから見ると大きく四つの時期に区分できる。

(1)模索期　1971．4．1～（1971．11．6）～1972．3．14

○基本構想案……部内資料として社会教育課内で準備されたもので博物館法の精神に則り、調査研究や教育普及活動を重視し、他の地方館と競合しないことなど、博物館の機能についての充分な認識があった。展示については常設展示と特別展示に大別した。もちろん内容については全く白紙であり、模索の段階と言える。この時期既に実行委員会などが実働しており、7部門（美術・工芸・歴史・考古・民俗・生物・地質）総合の博物館であることや建設地を秋田市金足の小泉潟付近にすることは決定されていた。

○一方、県外視察や日博協関係からの情報の流れとして、展示設計を行い、しかもそれを建築設計に先行させるべきだという事務局の考えが固まっていった。しかし業者選定の最終段階の頃、知事による秋田県立博物館についての基本的な考えが示された。

○博物館についての知事の基本的な考え方（1971．11．6）

イ）一般的には博物館は生物体のごとき有機的な機関である。また県民による県民自身の将来展望に資するものでありたい。

ロ）秋田県立博物館は県民総参加のもとにユニークなものを作りたい。そのために生態学的な視点を大事にしたい。

ハ）その意味で設計は早すぎる。思想や構想があって、設計され、建築されるべきものだ。まず基本構想を作ることを考えたい。

○そこで事務局では独自の構想とテーマ作りを進める一方、構想委員設置を具体的に推進した。人選については博物館学の気鋭の学者や博物館人を中心とし、自然と人文の専門領域を考慮した上で、建築と展示の設計担当者も入れることを意図して日博協の意見などを参考に決定された。

○秋田県立博物館構想委員（役職は当時）

倉田　公裕　　山種美術館学芸部長
柴田　敏隆　　横須賀市博物館学芸員
加藤　有次　　国学院大学助教授
長野　隆行　　安井建築設計東京事務所設計部次長
佐々木朝登　　ＫＫ丹青社科学造形研究室総括ディレクター

委員相互、対事務局との再三にわたる討論を踏まえて、倉田氏を中心として秋田県立総合博物館設立構想は1972年３月14日に発表された。

(2)基本構想期　1972．３．14～1972．７．21

○設立構想の説明会において開館期日を昭和50年４月頃とする事が決定された。

○この構想では博物館法の精神を土台とした上で、博物館は生涯教育のセンターとなるべきこと、県立博物館は国立と市町村立とに対して補完的役目、調整的機能をもつこと、地域学術と郷土誌の中心となるべきことなどが明確に示された。

○以上の項目は従来の博物館の行き方の延長線上にある考え方であるが、その他に全く新しい博物館の責務として「博物館における総合化」がこの構想の中にもられた。事務局はその具体化を展示における総合化と研究における秋田学の確立の２点において捉えた。前者は現在の第１展示であり、後者は現在及び将来の第２展示である。

○秋田県立博物館の第１展示はこの設立構想の提言に基き、事務局の原案、展示業者の協力を得て、僅か90余日後には「展示基本シナリオ及び設計書」として印刷に付された。

(3)実施設計期　1972．７．21～1974．３．６

○展示側から建築設計側に対して展示室の容量などが提示され、この後両者は平行して進められた。

○展示設計の公的承認のための様々な説明会が開かれ、唯一の公式的批判(「現代」のとりあげ方）についても収拾の方策がとられ、事務局の原案が了承された。その後実施設計に移り、展示の各パート毎のラフ・コンテ作りが進められた。前後して展示の従的部分（ホール、休憩室やサインなど）の詰めが行われた。

○この時期の最大の仕事量となったのは展示資料を中心とした資料の収集であった。購入や委託のためにかなり大きな予算が獲得され、昭和48、49年の継続費として執行された。

(4)施行期　1974．３．６～1975．５．５

○展示費が決定され、業者との正式な契約がなされた。ラフ・コンテから実施図、施工図と実際に近い形に作業が進んだ。製作された模型などの検収が行われた。

○キャプション原稿から完成までは大きな仕事であり、製作されるまでには多くの手順があり、労苦があった。

○展示物の取り付けが終り、展示室と収蔵庫の燻蒸がなされた。開館式5月5日、一般公開5月10日。

振り返って設立構想以後の流れは割合順調であったが、何と言っても展示の基本設計の時間があまりに短かく、なおかつその段階でも全部門の担当が揃っていなかった事は完成までに大きな影を落した。

3．総合化について

設立構想で用いられている「総合」という言葉について事務局の内部及び事務局と委員との間でかなり突っ込んだ議論があった。構想では「総合」と「綜合」を区別し、前者は単に各部門がそこに一緒にあるだけの並立的総合であり、綜合とはそれらの諸分野が互いに有機的に結合している状態を指すとされた。（現在「綜」は用いられないので後者の意味で「総合」を用いることにしている）議論の多くは、抽象的な論理としては上記の使い分けが認められるとしても、例えば総合化された展示の状態とは具体的にどのような姿を指すのかという点にあった。それを具体化する方策を模索する事で了解した形となったが、学芸担当の人員が増加するに従って総合についての執着心ないしは意識が多少拡散して行き、原点についての不毛の論議があった事も事実である。

設立構想委員にはかった事務局の基本的な考え方と統一テーマは以下のようなものであったので、第1展示については「秋田の自然と人間の歴史」をどのような形で総合化するかに意が用いられた。

○秋田県立博物館についての基本的な考え方（案）

イ）自然と我々の祖先がはぐくんできた郷土の文化を愛し育て、その輪を社会と未来に向ってひろげる博物館

ロ）物事を深く見る目を養い、真理を追求する態度を培う博物館

ハ）豊富な資料を有し、いつでも誰でも見られ調べることのできる情報センターとしての博物館

ニ）つねに問題を投げかけ答えに応じる博物館

○展示の統一テーマ　　秋田の自然と人間の歴史

イ)地球の誕生　ロ)地質時代の秋田と生物の進化　ハ)人類の出現と文明の萌芽　ニ)生態的自然

ホ)歴史時代の秋田　ヘ）庶民の生活とくらしの知恵　ト)文化の発展と現代の環境

(1)テーマとシナリオの作成

○7部門を総合できるテーマとして「秋田の自然と人間の生活」を「時の流れ」によって展示することを決定するまでの検討がまずあった。「時の流れ」の他にも「秋田の四季」とか「水の循環」などの代案があげられていた。

○テーマに沿って各部門毎に展示案を作り、内容について全体で討議をする。修正された部門案を1枚にまとめて作業案とする。（第2表）

○地質時代と歴史時代の時の長さを同一に扱う困難性から全体を三つに区切り地質時代・原始時代・歴史時代とし、それぞれ地質・考古・歴史部門が中心となって項目を一本化した資料を作り全体討議にかけ、シナリオ粗案とした。この際の最優先の条件はできるだけ多くの部門の項目をとりあげることであった。しかし実際の作業が始まってみるとどうしても異質すぎたり、展示の技術的限界などから第3展示に回すべきものも多く出、かなりの変更を余儀なくされた。

(2)表現方法とレイアウト

○前述のシナリオを中心に展示設計者と共同作業で全体をどのように構成するか、各部分の構成をどうするかなどくわしい討議や資料の確認作業が行われた。

○この際の特徴は展示全体の容量を出してから建築設計に持ち込めた点と、資料の収集が全くといってよいほどなされていない段階での設計であり、不確定要素が非常に多かったという２点に集約される。

○以上の条件のもとですぐれたデザイナーの着想により、外周部分で時代の代表的場面をカットしてジオラマを中心に見せる。そして、カットシーンの間には小部屋を設けて、時代のつながりやテーマの補足をしながら、できるだけくわしい資料を出すという二重の展示方式が生み出された。現実に完成した状態でジオラマと言えるものは少ないが、便宜上前者をジオラマ通り、後者をブランチと呼んでいる。また片面展示に限定すべきことも共通理解が得られ、原則的な方針として貫かれた。

(3)討議と決定

○他の館と同様、秋田でもこれらの検討は何回もの事務局内部の討議、構想委員やデザイナーとの共同討議の反復、スイッチバックによって煮つめられたもので、その途中では幾多の提言や着想・危惧が現われ、消えていった。多くの外部機関から公私にわたり意見をきいたが、すべて事務局が主体性をもち、内容については殆ど学芸担当の作業がまず先行し、問題点を充分に狭めてから判断がなされたため、決済段階でも公表後も、他からの変更要求がほぼなかった事は大変幸いであった。

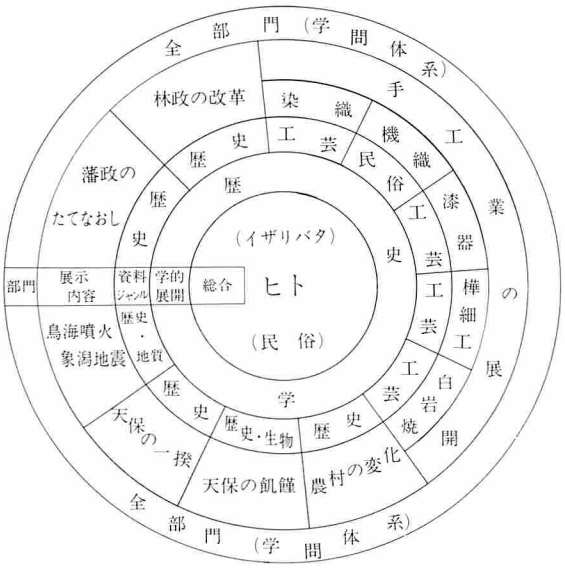
○下部での民主的な討議を充分行うことは秋田県立博物館のように積み重ねや土壌のない、１回きりの事業ではリスクを少なくする唯一の方法であろう。

(4)総合の１例

○第２表のような作業案から実際の展示に至る過程は、討議などの外的要素による操作を重視しないで、個人の思想、学理などの統一体によって作られた考え方に様々な条件を付与する形がとられた。

○一つの例として「33新しい時代の動き」のブランチを見ると、第２図のように各分野の資料が歴史学の流れによって配置され、その中心のむき出しの台上にイザリバタが置かれて老女の人形が座している。象徴的に「人」を中心としてその周辺にその当時の人の生活を語る資料があり、学的体系は更にその外側にある。このようにその時代時代に生きた人とその生活を総合的に展示する方法としてはジオラマが最も適切であり、第１展示の狙いもそこにあったと言える。

第２図　総合の１例



(5)総合の結果

○総合化の手法としてジオラマを多く採用したこと、また、その周囲をふくめてユニット化したこと。

○展示に人を登場させることによって、その時代毎の大衆を中心に構成し、子どもや女性も入れ得たこと。

○時代やテーマを中心に部屋が構成され、学問体系の枠をはずした形になし得たこと。

○ジオラマの考証、解説文の検討など目に見えない他部門の参加があったこと。

○とにもかくにも、地球の誕生から現在まで展示を通したこと。

○第１展示は第２、３展示や将来の野外展示との関連においてとらえ得たこと。

(6)批判と問題点

○一方ではきびしい意見や批判も数多くあった。秋田をシンボライズするものがない、驚異的でも感動的でもない、もう少し入場者を心理的にまきこむものがほしい、単なる並立総合である、平板で退屈だ、模型・模造ばかりで博覧会のようだ、資料が多すぎる、昭和史は別にすべきだ、強力な未来指向に欠ける、まとめの段階での館の主張が弱い、学校教育的すぎる、優等生的な弱さがある、……など。

○これらの中には館全体や新しい博物館像から的はずれなものや技術的な限界を指摘できるものもあるが、今後のために謙虚に受けとめる覚悟であるし、学芸担当としても以下のような反省や問題点をもっている。

イ）現代のとりあげ方によって空間的に総合化できる要素（地理や生物）が大部分ぬけたこと。

ロ）美術や工芸のように特殊なものを資料としてとりあげる傾向の強い場合と、自然系にある、より普遍的なものへという傾向を統合し得たとは考えないし、その可能性についての確かな見通しをもっている訳でもないこと。

ハ）自然と人間のかかわり合いをとりあげる際、最も大切な第四紀学的視点が非常に少ないこと、これは秋田における自然史学・第四紀学的蓄積の少なさに由来し、そこにこそ今後の秋田県立博物館の使命が見られること。

４．展示におけるソフトウェアとハードウェア

秋田県立博物館の展示は多少の単体発注の委託模造を除けば全く１社による展示設計施工の珍しい例である。このような形は博物館界において今後は増加するものと予想されるが、当館についても当初は設計と施工を同一業者にする点についてはかなり難色があり、決定には時間がかかった。

ところで、展示設計施工という一つの流れについて、業者自身の経験や認識もまだ充分に深化・確定しているとは考えられない。特に、秋田県立博物館においては学芸担当が博物館の展示やその技術的方面において全く素人であった事が大小の障害となった事は否めない。大部分の担当はシナリオの段階で経験不足から視覚的イメージを持つことができず、勢い設計業者に頼り、アイデア不足をせめる場面もあった。

今一通り展示を終わって、学芸側のソフトウェアの範囲と業者側のハードウェアの中間的領域が大変大きく、重要であることに気付くのである。秋田の場合でもデザイナーと学芸側のフロントとが互いに相手をカバーしきれない一面もあった。これらの実際の姿を再現する一つの試みとして施工期におけるキャプション原稿の流れをみてみたい。

○学芸担当が原稿を書くことはソフトウェアであり、原稿が写植オペレーターの手に渡ればハードの範囲になることは明らかであるが、それらの前後にたくさんの手順があり、その手順によって10数名の学芸担当が動き、その仕上りによって多くの下請け業者を動かすことを考えれば、この手順の問題は大変大きいと言えよう。

○しかるに、原稿を書く前の手順からしてかなり流動的対応を迫られる場合がある。即ち、字数をきめてから原稿を書くのか、または、書かれた原稿の字数を最大限に生かすのか、この点から選択が分れる。しかもこれはレイアウトの進行状況、さらに資料の確定状況から割り出される事であり、展示の各部分で異なる可能性もあり、それがひいては展示全体の流れをよどませる主因になることもある

○ソフトの範囲でも、例えば執筆要項や基準についてかなりの検討が必要となる。秋田の場合では表現の仕方、漢字の使い方、ルビのふり方、数字の使い方など30項目について基準を作って使用した。
○実施に当っては、下の両方のやり方が行われた。
イ）レイアウトと面積計算が行われる。タイトル格付けの（大・中・小）により字画の大きさをきめる。字数を示し、原稿が書かれる。
ロ）原稿を作り、タイトルの格付けをし、字画の大きさをきめて、面積計算をし、割りつける。
○学芸側とデザイナーとが、慎重なコミュニケーションを交わさなかったために起こった齟齬の例もある。タイトルの格付けを承認した後に気軽にその変更を要求し問題になった事があるが、これは学芸側が「タイトルの格付け＝タイトル及び解説文の字画の大きさ」という事実を知らなかったし、デザイナーも全くその点について説明しなかった為に起こった例である。互いの用語については特に留意する必要がある。
○書かれた原稿をコピーし、全員が全原稿を読み検討する。その意見によって、直された修正原稿を、全員の討議によって承認する。承認原稿をもって上司の決済を得、決済原稿を業者へ渡す。
○業者のチェック、写植引き伸ばしの部分とシルクスクリーンプロセス仕上げの部分のふるい分け、拡大比率や文体の選択、写植製作、業者による自主校正、学芸担当の初校―誤字、活字の大きさ、曲り、原稿の訂正―、再校、上司の決済、責了or校了のサイン、製作。これらは解説文、タイトル、ラベルのそれぞれについて行われる。

秋田県立博物館の場合は、業者の経験による深い配慮が功を奏し、時間的な問題は殆ど起こらなかったが、通例は時間的余裕のない状態に追い込まれ、仕上りに問題を残すことになる。デザイナーが学芸員の領域に入ってくる事が事実上困難であることを考慮すれば、結論的には博物館の学芸員は展示業者以上に展示のハードウェアに精通してもよいのではないだろうか。

おわりに

秋田県立博物館の大きな特色は、理念作りからスタートした総合博物館であることと、まったく資料がない状態から出発した新設の博物館であることの２点と考える。展示についても開館直後からその修正や発展について考えてゆくべきものであろう。今後の御指導をお願いする。

参考文献

1.倉田　公裕　他（1972）　秋田県立総合博物館設立構想　秋田県　64ページ　秋田
2.新井　重三　（1970）　博物館の展示　博物館研究　Vol.42　No.4　pp20～32
3.下津谷達男　（1968）　博物館教育論―序説　国学院大学博物館学紀要　第１輯 pp13～19
4.千地　万造　（1973）　博物館づくり　博物館研究　Vol.10　No.2.3　pp２～14
5.日浦　勇　（1973）　展示の考え方　博物館研究　Vol.10　No.2.3　pp18～19

第2表　総合化のための作業案

部内資料　720421

秋田県立博物館　展示の基本構想　準備資料　No. 2

（綜合展示）
1972, 4, 21

時の流れ	地質	生物	考古	歴史	美術	工芸	民俗	綜合化
	1.地球の歴史から見た秋田 地球の誕生から羽越変動を（グリンタフ変動）経て現在に至るまでの地かく変動の経過を扱う			1.生物の進化と秋田 地球上に日本列島―ひいては秋田の風土が成立する長い地質時代に原始生物は静かに進化の道を歩んでいた。現在の秋田の地層からもその事実を物語る化石がみつかっている。				
45億年前	1）太陽系と地球の誕生 2）地球の層状化と地かくの形成 3）日本の地史　先カンブリア時代 古生代 中生代			生命の起源、生物体の起源、種の起源				
7千万年前	新生代　古才3紀			進化の事実―形態、発生、分布、化石 化石と種の変化、化石と環境、硅藻土や石油、人類の誕生				
2700万年前	4）秋田県の地史 イ．新才三紀以前の秋田（日本海形成以前） ロ．門前階（グリンタフ活動初期、激しい火山活動、秋田の石炭時代、阿仁合型植物化石、温帯気候） ハ．台島階（グリンタフ活動中期、硅化木、台島型植物化石、温帯南部の気候、地向斜初期） ニ、西黒沢階（浅海期、デスモスチルス、オパキュリナ、暖流黒鉱形成期） ホ．女川・船川階（深海時代、寒海期、日本海の孤立、石油形成、鯨類化石、還元環境） へ．天徳寺・笹岡階（対馬海流とトリテラ、造山運動期、脊梁山脈の形成）							
200万年前	ト．才四紀（男鹿半島と八郎潟の地形を中心に）							
3万年前				1．旧石器時代の秋田 ①旧石器時代の自然環境 地形、気候、植物、動物、その他 ②旧石器時代の遺跡 遺跡の分布その他 ③旧石器時代の生活用具 道具の名前と使用方法、道具をつくる道具とつくり方				
1万年前			2．秋田の原始自然 今から約1万年前、最後の氷河が退いた頃から秋田の風土は地質的にも気候的にも大きな変化をうけていない、ではその頃の、生物自然はどのようなものであったと考えられるか。 植物群落の遷移、高層湿原 水平分布、垂直分布、原植生 当時の動物相、個体群の増減		2．縄文時代の秋田 ①この頃の自然環境とすまい 気候、植物、動物、その他、住居は洞穴、岩陰を利用 ②土器の発明と使用 (2)前期、中期の世界 ①土器の変化　とんがり底から平底へ ②自然環境の変化　海進海退の問題 ③秋田の南と北　土器の分布圏の問題、交易その他 ④すまいと集落　竪穴住居趾と集落 (3)後期、晩期の世界 ①呪術と祖霊の世界　土偶、土面、環状列石、墓地その他 ②亀ケ岡式土器　器形と文様について他				
2000年前				3．弥生時代の秋田 ①コメの伝来と稲作の北進　モミ痕のある土器と遺跡 ②遺跡の分布とその性格 4．古墳時代の秋田 ①漁猟の生活から農業の社会へ　西目、金足、五里合の出土品 ②秋田の古墳と出土品				
1200年前	2．秋田県の鉱山史 1）古代の鉱山			5．古代の秋田 ①城柵と東北開拓　秋田城、雄勝城、払田柵、条理遺構その他 ②清原氏と後三年の後　後三年合戦絵詞他 ③男鹿埋没家屋、胡桃館遺跡の意味するもの				
	2）中世の鉱山	3．歴史時代の秋田の自然 人間にとって自然は大きな脅威であった、その自然へ挑戦する生活を通じて人間は自然をどのように変えてきたか。 栽倍と飼育	6．歴史時代 鏡、チャシ、経塚十三本塚、中世近世の城等を考古学的方法で、	◦中世の秋田 鎌倉新体制の進行状況を明らかにし、そのもとにおける農民の存在形式を追求する。また戦国時代の秋田諸大名の動向と農民の生活を追求する。 1．中世の展開と秋田 武士団移住、農民の存在形態 2．秋田諸大名の対立と農民 大名配置、農村の状況	a．鎌倉時代以後の宗教文化の波及 1．秋田の木彫 地方作仏像 2．仏教絵画 b．桃山時代以降の	秋田の工芸 主として藩政及びそれ以後の時期の工芸	文化の基層として形成された民俗資料を庶民生活及び産業発展のあとづけとする。 ・鉱山開発 開山伝説（阿仁） 労働と用具 （鉱山絵図）	
	3）近世の鉱山	森林の破壊 伐採と植林 平野の開田		近世の秋田 藩体制成立から崩壊までの推移をあとづけ、その中心視点に農村の生活をおき、それと深い関連をもつ社会政治構造及び文化との有き的関連をはかりたい。 3 藩体制の成立と農村　（検地、新田開発） 4 中期藩制と農村の荒廃　（経済の発達荒廃田） 5 後期藩制と農村の変質　（商品生産、農村の変化）	狩野派絵画の波及 1．秋田狩野派男鹿屏風 2．狩野流派行期の藩主等の絵画 3．狩野派より洋画風へ（秋田蘭画） c．藩政期の書家金蘭斉石田無得益戸楢州等 d．藩政期の書家の余技俳句、文人画 e．藩政期の文人洋和学君、歌人藩主等の墨跡 f．明治期以降における藩政期の系譜 1．平福父子及門下生、広業、小場、容如等の画人 2．湖南、藍城等の書家 g．洋画家	1．金工　秋田の風土の所産、金銀銅の金工藩政後期より脚光木目銅 2．陶工日用雑器を主とする、五城目、白岩等の諸窯は東北先進地陶工の指導 3．染機あかね紫根　黄八丈、秋田うね織等紺染、縞木綿 4．樺細工 5．漆工 6．秋田木目銅 7．曲げ物 1．金工　銀線細工 秋田銅産の系譜 2．陶工　楢岡 3．漆工　本荘塗 生駒漆器 4．進養鉄治　現代銅器 5．曲げ物　大館	2．農業の発達 農耕用具、農民の生活（衣、食、住）農耕信仰行事 3．商業の発達 商業交易用具、市場 4．交通運搬 海運、川運（渡舟） 5．林業の発達 秋田杉と山樵 6．狩猟習俗 マタギとタカ狩 7．織物と染色 地織と織機 8．諸職（手工業） 和紙、郷土人形、鍛治イタヤ、竹細工、漆器樺細工曲げワッパ 9．醸造業、 酒、ミソ、しょうゆ 10．民間信仰と習俗 庚申、道祖神など 11．民俗芸能 12．秋田の歳時記年中行事祭礼	
	4）明治以後の石油開発史 5）現代の鉱山	絶滅した野生動物 狭められた生息環境 生物の質的変換 帰化生物 現在植生		◦近代の秋田 近代の成立、発展と農村の変化を軸とし、あわせて関連産業をみる、またそれらを基礎とする文化にも注目したい。 6．近代の成立と新農村（地租改正、地主制、産業の発達） 7．近代化の浸透と農村の動揺（恐慌と農村） 8．戦時体制と農村（戦争と秋田、農村の状況）	h．郷土をテーマにした現代画家 i．郷土をテーマにした中央の画人			
	3．秋田の自然 現時点における秋田県の景観、気候等自然地理的要素の特色を明らかにする 秋田の自然（四季） 地形模型 火山、湖	4．自然と人類の調和 人類は自然を変えることによって繁栄を謳歌したが、人類も結局は地球生物の神個体群にすぎない、自然のサイクルの中でしか生存は不可能ではないだろうか。 地球生態系 自然保護 秋田の未来		◦戦後の秋田 急変し、また変りつつある秋田と農村の姿を未来への展望のもとに追求したい。 9．農村の変ぼう（農地改革、農村の近代化）				

特集Ⅰ第1展示

クジラの化石と第一展示

加藤万太郎

地質担当として博物館の準備過程を語ろうとするとき、クジラの化石をぬきにしては考えられないほど、クジラと博物館の間には深い関係ができてしまった。

現在博物館に展示している化石を、筆者が発見したのは1970年10月であった。それからクジラに関する資料を集めて研究を始め、1971年8月には発掘作業が終っている。その後も研究は続けられ、1975年3月、クジラの展示が終了した時点で、クジラの研究も漸く一応の終結となったのである。このように、筆者にとってクジラの化石に関する研究は、博物館とのかかわり、その準備作業など、まったく同時に進行しており、しかも地質部門の展示構想や博物館に対する考えは、クジラの化石を通して形成されてきたともいえるのである。

1．発見から展示まで

1970年8月30日、本荘市芦川で中新統女川階の地層からクジラの化石を発見した。この化石を発見したことが契機となって、同年10月24日には、由利郡矢島町川辺字砂子沢のほぼ同じ時代の地層から、またもやクジラの化石を発見したのである。芦川の化石は露頭が悪く発掘は失敗に終ったが、矢島町のものだけは露頭の条件もよく、化石の保存も良かったので、是非発掘して研究してみようということになった。その後の経過は次の通りである。

○発掘研究準備　1970年11月～1971年7月

(1) クジラに関する文献を集めて研究を始める。一方化石発掘作業の進め方についての調査を行う。

(2) 土地所有者、矢島町、県教育庁、秋田大学等と交渉し、発掘の承諾や協力を得ること、その他発掘の諸準備を進める。

○発掘作業、1971年7月23日～8月16日

(1) 巨れき、樹根の除去

化石は道路に面した高さ20 m の崖の上部にあったが、その上には重さ300 kg 以上の巨れきが転在しており、しかもこの崖の下には民家があるという状況だったので、これらを安全に除く作業が地元の方がたで行われた。

(2) 掘り出し作業

当時筆者の勤務校であった秋田県立由利高等学校地学部員と有志の応援を得て表土および化石の上にある泥岩を除く作業を行った。ハンマーで泥岩を掘りおこすと、化石の上の泥岩は特に硬化しているために、硬い泥岩におおわれた化石が現われる。この状態で全体を現わし、次に硬い泥岩を除くと骨格化石があらわれた。そのままにしておくと間もなく細かに割れるので泥岩を除くと、すぐスプレーガンを使ってクレアラッカーを吹きつけるという方法で作業を進めた。また掘り出し作業にあわせて、写真撮影およびスケッチを行なった。

(3) 掘りおこしと運搬

掘り出し作業がほぼ終った段階で、化石全体に石こうをかけて固定し、全体を10個のブロックに分けて掘りおこした。掘り上げた化石は裏返しにし、裏面にクレアラッカーをかけて硬化させた。運搬には農家の軽トラック3台を動員しそれぞれ荷台にはモミガラを満載させ、その上に石こうで固めた化石ブロックをのせて運搬した。

○石こう除去　1973年11月～1974年1月

石こうで固めてある各ブロックの裏面を樹脂で完全に固定した後、表面の石こうをハンドグラインダーで小さく分割しながら取り除き、残った石こうは薬品処理をして完全に除いた。

○クリーニングと整形　1974年4月～11月

石こうを除いた各ブロックは、発掘の際に使ったラッカーをシンナーで洗い流し水性ボンドで硬化させた後に各ブロックを組み合せわて発掘当時の状態に並べ、この状態で骨格の形や位置を確認しながら細部の泥岩を取り除いた。またこの時点で砕けた骨の接合、穴の補修など明らかに形のわかる部分については石こうで整形を行った。

発掘当時は、形があったものでも、この時点では、どうしても組み立てられない部分については、発掘当時の写真やスケッチにもとづいて復元した。

以上発掘からクリーニング・整形までは筆者の責任において実施したものである。

○取り付け作業　1974年11月～1975年3月

取り付け作業は展示業者の責任で進めた作業であるが、その準備として、縦、横、10cmきざみの方眼紙を作り、この上に化石全体を組み合わせ、展示できる状態に全体の形を調整して、これを写真に撮り、この写真にもとづいて、展示準備が進められた。なお、化石を保護した石こう除きから展示にいたるまでの現場作業は矢沢造形研究所が行ったものである。

○研究作業　1971年7月～1975年3月

クジラの骨格に関する記載的研究と、展示の際のクジラの絵の指導は国立科学博物館の長谷川善和氏に委託し、その他はすべて筆者が担当して進めた研究であり、その成果は別に報告※している。

※長谷川善和、加藤万太郎（1974）秋田県由利郡矢島町産中新世の鯨化石―デワクジラ―秋田県立博物館研究報告書

2．山から出たクジラと第一展示

クジラの化石を「秋田のおいたち」を語る展示の導入に使うというアイデアは、この化石を発掘する直前の1971年7月18日行った矢島町との交渉の際に考えたものであった。

その頃矢島町には、化石を矢島町におきたいという声があり、最後的には町長の決裁を仰ぐことになった。この際に、化石を博物館に搬入することに賛成していただくために発言したことが、ついに実現する結果となったのである。当時筆者は、この化石を有効に活用する方法として、県立博物館は郷土を語る博物館であり、郷土を語るための展示は、時の流れに沿って「秋田の生いたち」を語るべきであると考えていた。この論理に従ってクジラの化石を、博物館に展示することによって、秋田の長いおいたちを語る貴重な資料として活用できる。皆さんが博物館に搬入することを賛成し、予想通りの化石が採集されるとすれば、県立博物館の目玉として、秋田の長い地質時代を語る導入展示にも使えるはずである。町の公民館に置くよりは県立博物館に展示し、博物館を訪れた際に、おらが町から出た標本として誇りに思えることの方が、皆さんの気持に答える道と思っているので……という趣旨の説明をし、町長からは「化石を矢島町に置くべきではない」との裁断を得て、化石の発掘作業にはいったのであった。

「山から出たクジラ」というタイトルは1971年2月、ＮＨＫのローカル番組で化石を紹介した際に番組につけたタイトルである。

筆者が県立博物館準備事務局の職員となったのは1972年4月である、当時地質部門の収集資料は、このクジラの化石とそれに関する写真だけであった。しかもこのような事情の中で3年後の1975年3月には開館するという方針だけは決っていた。従って1975年3月に開館するためには展示作業日

程から逆算して、1973年の暮れまでには展示資料がすべてそろっていなければならない。一時を許せない状況の中で、展示構想の検討が続けられた。4月には第1展示は7部門の綜合展示として、時の流れに沿って「秋田のおいたち」を取り上げることが決定し、クジラの化石は秋田のおいたちを語る展示への導入として、第一展示室の前におくことが決まると、いよいよ時の流れに沿って展示項目を選定することになった。しかもクジラの化石を導入展示としたいきさつもあって、地質部門がそのトップを切ることは当然のことと思われていた。

第1展示の項目を決めるにあたって、地質部門として考えたことは、まず時の流れにそって秋田のおいたちを語るのに必要な項目をあげ、次に博物館はあくまでも標本（本物）が主人公でなければならないという考えから、標本として何が置けるか、標本収集の可能性がうすい項目は切りすてる。最後に他の部門とのバランスの上から調整を考えるというように項目を選定する段階を考えて、この作業に取り組んだ。このようにして最初に考えたものは17テーマ、28項目であったが、それを次の段階では14テーマにまとめ、最終的に時の流れに沿って選ばれた項目は11テーマでまとめることに決まった。これらのテーマを選定するにあたって考えたことがらの概要を示すと次の通りである。

(1)　地球の誕生

秋田のおいたちを語るのに、どの時点から展示を始めるかは大いに迷ったところであるが、1972年の夏ごろ、それまでまぼろしの隕石といわれていた仙北郡角館産の白岩隕石が角館南高等学校に保存されていることがわかり、これをとりあげて地球の誕生から展示することとした。

(2)　生命の発生

地球の誕生から扱うと、どうしても欠くことのできない要素であり、できればここを出発点として生物の進化も扱いたいと考えたのであるが展示資料の見通しがたたないために中止した。この時代に見合う資料は今のところ入手できないためにコレニアを置いている。

(3)〜(5)　は日本列島の形成過程を扱ったもので、これだけの展示ではほとんど説明できないのであるが、古生代の日本は、日本列島を作った最初の海底火山が始まった時期、そして陸上植物がようやく現われた時代でもあるデボン期を扱っている。

中生代の日本は、子供たちが良く知っている恐竜の時代を取り上げたのである。

新生代の日本は、日本の石炭時代といわれている古第三紀を取りあげ、当時日本は大陸に陸続きであったことを中心に扱っている。

(6)　「グリーンタフ活動はじまる」から「秋田にゾウがいたころ」までの展示は、秋田の地史を扱ったものである。この中で「グリーンタフ活動……」から「奥羽山脈の形成」までは、秋田大学藤岡一男教授の論文※にもとづいている。

※藤岡一男（1972）日本海の生成期について、石油技術協会誌375

最後の「秋田にゾウがいたころ」については15万年前としてあるが、この絶対年代については大変迷ったところであり、男鹿半島浜間口海岸で採集された歯の化石について、リス・ウルムのものであるとする論文があること、昭和町槻木のナウマンゾウが出た場所を見ると50 m段丘の基底部であることなどから推定したものである。なお、ナウマンゾウの復元にあたっては、国立科学博物館の長谷川善和氏が監修したものである。

特集Ⅰ第1展示

岩井堂洞穴遺跡のジオラマ

富樫　泰時

○はじめに

第一展示室は「秋田はどうであったか」ということに視点を置き、それを時の流れを軸にして総合（自然・人文）展示をおこなうことを目的として出発した。この中で考古部門が中心になって進める所は、地質部門から引き継いだおよそ2万年ほど前から平安時代までの間であった。

以上の基本的な考えに基づいて展示項目を考え、前頁のような項目ができたのである。時代の変化をできるだけいろいろな物で――例えば縄文時代前期～中期にかけては土器の変遷を中心にその広がりを、後期～晩期にかけては葬制の変遷（米代川流域の）――示したいと考えたのであるが、資料不足でなかなか思うような組立はできなかった。

ジオラマは総合展示の一つの方法と考え「先土器時代――米ヶ森遺跡――」「縄文時代――岩井堂洞穴遺跡――」「住まいと集落――下堤遺跡――」「城柵と開拓――払田柵跡――」の四つを作ることになった。

これらは岩井堂洞穴遺跡から模型の胡桃館遺跡を含めて衣食住の住に視点をあてたつもりである。

○展示の意図

縄文時代のはじめ頃は竪穴住居の他に自然の洞穴や岩陰を利用して住居とし、生活したことがわかっている。そこでその様子を推定復原して、当時の生活に思いをはせ、後の展示（ジオラマ・模型）とあわせて住まいの変遷を考える。

○遺跡の選定

ジオラマにした遺跡はすべて実在した遺跡で、現地ロケをおこなって製作したものである。縄文時代早期の遺跡は、県内に数ヶ所確認されているにすぎない。その中で、岩井堂洞穴遺跡は昭和38年から昭和45年まで7次にわたって発掘調査され、多くの情報が出されていた。中でも、もっとも良い状態で残っていたのが第4洞穴の7層の時代（縄文時代早期後半）のものであった。以上の理由によって岩井堂洞穴遺跡の7層の時代をジオラマ化することにしたのである。又これと相前後する時代の洞穴――山形県日向洞穴遺跡、岩手県蛇王堂洞穴遺跡――の発掘調査報告があったことも復原を可能にした。

○シナリオ

洞穴は山間の川岸にある。洞穴の前には川原、川があり、そのむこうは山になっている。季節は秋、時刻は午後である。洞穴の中には女（大人）1人、子供（男）1人、外に男（大人）1人を配し、男は狩から帰って、獲物の一部を持っている。女は洞穴の入口にある炉で尖底土器を使って料理し、子供は外の男に向って何か合図をしている。その他洞穴内には台石、弓、矢、槍などがあり、一匹のひきかえるが入りこんでいる。

○大きさ、配置、方向

洞穴そのものの大きさは奥行3.2㎜、入口幅1.6㎜、洞穴内の幅4㎜、高さ1.5㎜というものである。この大きさは実物大で作れる可能性をもっていたので実物大ということで仕事を進めたのである。

洞穴内の人の配置は炉の位置を考えて決めた。炉の位置は発掘調査の事実に基づいたもで、洞穴の入口部の左側に自然石を並べた炉で、その中から尖底土器が一個体出土したのである。炉の位置が決まり、そこで料理する人（女）の位置が決定し、その横で子供が外の人（男）に合図しているという

大きな配置が決定した。

洞穴の方向は西向きで、午後の陽光が川の水面に反射して洞穴の中にも入ってくる。又展示の方向は小さい洞穴で奥行きもないこと見学者に圧迫感を与えないようにすること、視野が広く開けるようにということなどを考慮して洞穴の中から外を見るという方向を決めたのである。

○具体化

以上の基本的な考え方を決めて具体化をはかったのである。展示設計担当の丹青社と現地ロケし、何回が打ち合わせをおこない具体化するために必要資料が要求された。それは次のようなものである。

(1)当時の植生状況	(2)人物復原	(3)人物のコスチューム
(4)狩の道具	(5)生活用具（土器・石器他）	(6)木の実
(7)土器（炉以外の）の位置	(8)サケ	(9)鹿の角の加工の仕方と方法
(10)環境音	(11)縄文人の声	(12)ひきがえる

この中で館が指示できたのは(1)、(3)、(4)、(5)、(6)、(7)、(9)だけで他のものについては専門の先生に指導をお願いして製作した。(1)は館の生物担当から指示していただいた。(2)の人物復原はもっとも重要であることからこの復原は国立科学博物館鈴木尚博士に御指導をお願いし、製作現場まで足を運んでいただいて指導を受けて製作した。(10)は鳥の声が主で、これについては秋田大学小笠原暠助教授、構想委員の柴田敏隆先生から指導を受けて製作し、(12)のひきがえるは柴田先生から製作していただいたもので、これだけは、口が動く。(11)の縄文人の声についてはいろいろ考えたのであるが、決断つかず中止した。又洞穴そのものの復原は、実物から粘土で型取りして作ったものである。

以上のように、いろいろな人達の協力を得てこのシオラマはできあがったのである。展示物は次のとおりである。

1.人物　(1)男、35歳前後	(2)女、20歳前後　腰に皮をあてる。	(3)子供、5・6歳
2．動物レプリカ	(1)ヒキガエル（口が動く）	(2)鮭（2匹）
(3)鹿のモモ内、切身、骨	(4)鹿の毛皮	(5)鹿の頭骨、角
3．生活用具レプリカ	(1)尖底土器（3点）	(2)炉・焚火
(3)縦形石匙（3点）	(4)大型石器（1点）	(5)台石　（2点）
(6)石鏃　（2点）	(7)骨角器　（5点）	(8)槍　（2点）
(9)弓　（1点）	(10)矢　（6点）	(11)クルミ

○おわりに

このような経過を経て岩井堂洞穴遺跡のジオラマは復原されたのである。岩井堂洞穴が復原可能であったのは前にも記したように発掘調査に8年かけ、そのつど報告書が刊行されていたというように、大変な蓄積があったから完成することができたジオラマだと考えられる。又考古が中心になって担当したジオラマ四つを見ていただけばわかるが、「城柵と開拓—払田柵跡—」だけが異質であると感じるであろう。これは岩井堂洞穴の場合と全く逆で情報が非常に少ないためにあのような形になったのである。現在この遺跡は調査中であるのでまとまり次第展示を変えるつもりである。

展示物を見るだけで、その展示目的を理解できるように「そのものの時代背景、機能、他のものとの関連性」などから「総合的に理解されるよう留意」したのであったが、一つ一つの資料の詰めがあまかったと反省している。

参考文献

博物館研究　44—3「特集横須賀市博物館」昭和46年10月
博物館研究　Vol.10 No.2・3「大阪市立自然史博物館特集」昭和50年3月
小林　達雄　「歴史系博物館の展示——アメリカと日本——」東京都博物館協議会、会報No.9．昭和46年3月

特集Ⅰ第1展示

歴史学と展示の谷間に立って

国安　寛

1. 新田の開発すすむ（ジオラマ）

①藩政期農民の開拓観—非近代としての—

近世分野最初の展示は、平鹿郡十五野新田村（十文字町）をモデルとした「新田の開発すすむ」のジオラマを中心に、左側には秋田県域諸藩の新田率と、1729（享保14）年時点の秋田藩新田村(寄郷)分布図を示している。また、右側および下方ケース内には、新田開発関係の文書（絵図を含む）資料を配置するといった構成になっている。

秋田藩近世体制の確立を、一応、17世紀後半と判断しているが、その1つの柱として、近世前期新田開発の終了時を考えている。1729（享保14）年には、本田高およそ20万石に対して、本田並および新田が18万6千石であって、合計高に対する新田率は48%である。秋田藩における田の比率は、秋田・山本郡の50%台、川辺・仙北・平鹿・雄勝郡の70%以上で[②]、平均71%となっている。本田並および新田だけの比率を示す資料は不明であるが、こうした傾向は同様と思われる。そして新田村は、秋田藩の村総数およそ800か村の中100か村あって、その地域は、幹線河川周辺に分布している。つまり、秋田藩新田は、幹線河川から引水する水田を中心として形成されたといえる。

用水路の開削については、著名な箱根用水があるが、秋田藩では、八郎潟東部の馬場目川から引水する真崎堰と戸村堰などがある[③]。また、米代川から引水し、二ツ井を開発した「岩堰用水」をあげることができる[④]。山奉行として、岩石の開削技術を身につけた梅津政景が、鉱山の疏水坑の技術を用水路としての岩山開削に応用し、トンネルを作り完成したのが、二ツ井の「岩堰用水」といわれる。

この時期の新田開発は、確かに「先進技術」をもって[⑤]用水路を開削するような、今まで経験したことのない自然の改変を伴う大事業であり、その結果としての水田造成であった。

秋田県立博物館の視点は、こうした「先進技術」、そして、家老クラスの指導者を直接取り上げなかった。それは、農民の自然に対する構え方を中心課題としたからである。

秋田藩では、新開指（差）紙（開発許可状）をもつことによって、開発の権利が生ずる。受給者の多くは家臣であった。ここでは、檜山（能代市）の所預り多賀谷家の家臣（郷士）で、平鹿郡与作村（十文字町）の創始者与作の子御厩縫殿之介（七三郎）が、1651（慶安4）年に指紙を受け[⑥]、1712（正徳2）年に、小松七左衛門の代になって、十五野堰開削に着手している[⑦]。

しかし、十五野堰開削の中心人物は、伝承によれば、この堰の上流に位置する新古内村(十文字町)の治兵衛である。小松家は武士として総指揮を取り、また、資金面を担当していたと思われる[⑧]。治兵衛の果たした役割は、十五野新田村が新古内村からの分村であること、十五野新田村の肝煎が治兵衛の子で、子孫が世襲[⑨]したことによっても証明できる。

ジオラマの人物は、治兵衛を前景に入れ、ほか農民5人を設定した。また、当時の植生については、生物担当が現地調査の上、現況とやや異なる松の木、そして、ミズナラ・コナラ林・ササなどを配置した。

この場面は、途中まで開削した十五野堰が高低差が不明となり、流水せずに苦心していた晩に、治兵衛が夢の中で神狐を見て、駆けつけ、狐の足跡を発見して喜ぶ姿である。その足跡をたどって開削したら流水し、水田の造成を果すことができた。その後、神狐が立ち止まった場所に引上明神を建てて、現在に至っている。

このような伝承は、菅江真澄も収録している。雄物郡京政村（稲川町）の麻生与惣右衛門が、初雪の朝、狐の足跡をたどって、皆瀬川から引水し、与惣右衛門堰を完成した話である。[10]

これらは、測量技術の未熟な当時期の用水路開削の困難さを物語るものである。そこで人間を越える偉大な力をもつものが期待される。

しかし、導びくのは、人間とかけ離れた神や仏ではなく、身近な動物である狐であった。これは、当時の農民の発想からすれば、より現実性を帯びていたと思われる。

狐は田の神そして稲荷信仰と結びついたといわれるが、[11]すでに天明の頃、浅舞（平鹿町）の玄福寺住職釈浄因が、「野狐精」を稲荷明神とし、田神として祭るのは世俗の誤まった説という。[12]しかし、なぜ誤まったことをあえて世俗＝農民が信じようとするかに問題があろう。

もともと、人間は狐と共生関係にあると考えるからであり、[13]狐の聖域を犯したことに対する償いとして、稲荷明神を祭るという敬虔な祈りにつながる。そこに自然を畏敬する藩政期農民の心底がみえる。また、目前の希求である自立・安定という目的で、自然の改変を行なった農民が、やがて荒廃という報復を受けることを予想してか、いづれ、自然界における分限を肌で知る農民は、ただ祈ることでしか現状を過すほかはなかった。

②展示と歴史学

ここでは、博物館においての時間的にも内容的にも貧しい体験に基づいた論であること、また、この展示コーナーを中心として、歴史展示全体を念頭に置いたことも了解されたい。

歴史の展示は、歴史学の立場からいえば、歴史の論理を資料（物）で視覚に訴えて理解させるということになろう。

しかし、歴史を研究しその成果を発表するという歴史学の範疇で処理できる問題ではなかろう。つまり、歴史学と歴史展示は、歴史学と歴史教育の関係のような一定の距離を認めなければならない。また、人についていえば、歴史学に精通する研究者が必ずしも歴史教師として有能であるとは限らない。こういったことは博物館の歴史担当でもいえることだろう。つまり、歴史展示は、歴史学の成果に依拠しながらも相対的な自立性をもっているといえよう。

それは、博物館には歴史学とは異なる独自の目的があり、とくに展示については、展示理念や資料の価値観も、歴史学とは必ずしも同じであるとは限らない。展示はある目的をもって、理解させるものであり、単に技法上の次元で処理すべき問題ではない。従って、そういう意味では、近い将来には、博物館学の中に、「展示学」という分化した領域が成立する可能性をはらむ大きな問題であると考えられる。

つぎに、資料を展示に至るまでの経過を辿ると、つぎのようになる。

（研究成果）→テーマ設定→資料収集・調査研究→展示資料の選択→資料の検証→展示

資料を陳列するのではなく、展示するとすれば、目的をもったテーマが設定される。この場合に、一定度の学的成果なしには、テーマも考えられないであろう。そのテーマに基づいた資料の収集、および館内外においての調査・研究が行われ、多くの資料の中から、テーマに合致した象徴的資料を選択する。さらに展示資料を検証する。つまり、１つの展示資料をたて・よこ・ななめ・裏から検証を加えることであり、論文の引用資料のように、必要部分のみを切るわけにはいかない。さらに、展示資料を中心に、逆に類似資料や周辺資料の収集および調査・研究の必要も生じてくる。

従って、帰納的に選択した資料は、従来の研究成果をふまえた１つのピラミットであるが、展示資料の新しい研究によって、別の角度のピラミットも構築されることになる。

つぎに、ジオラマの展示についてみると、

ジオラマの設定→資料収集・調査研究→ジオラマの構成 →業者委託→検収→展示

となっており、基本的には資料展示と大差がない。

ここで問題になるのは、新田開発のジオラマの場合、18世紀初頭の秋田藩南部の自然と農民の総体を復元することであった。自然（とくに植生）については前にのべたが、農民の髪型・着装・道具など不明の点が多かった。例えば、中景農民の持つ鍬がある。すでに備中鍬が開発されていたが、使用不明であり、この場合は目印をつけるという目的からして、地元でいう「平鍬」にした。

こうした点や、他の面でも展示専門家から多くを教えられたが、とくに佐々木朝登氏の「未調査のものは展示に選ぶべきではなく、……芸術的な想像力に依存した展示はすべきでない」[14]とする科学的実証的な博物館人としての戒律を思う時、今一歩の力量不足を痛感する。

このジオラマの一般観客の観方についてふれると、「村の荒廃」や「定期市にぎわう」ジオラマは、タイトルをみないでも判断するようであるが、この場合は、狩かマタギと誤解し、視角上部のタイトルをみて、はじめて気づくようである。たとえ、いかに理念の上で整合された展示物であっても、直観で展示の意味するものをはあくできない展示は、成功したとはいえない。とくに「ジオラマ通り」であれば、なおさらのことと反省している。

こうしたささやかな経験から、ここでは２点についてのべたい。

一つは、博物館歴史展示の立場から、地域史研究に対して問題提起をすべきである。これは、従来の地域史研究では考えられなかった別の視角からの歴史の取り上げ方や、史料の取り扱かい方がなされるからである。これによって、地域の歴史学発展に寄与することになる。もう一つは、前にものべたが、歴史学と博物館学共に独自の目的があるから、博物館歴史学を創り出すことである。歴史学と相対的に自立した目的・視角・方法論をもっことによって、歴史展示の質的飛躍が期待できると思う。

2. 新しい時代の動き（ブランチ）

①流れの展示

前にのべたジオラマは、秋田の歴史の流れを断面で表現したのに対して、ブランチは、流れ自体や、その時期の説明に重点をおく展示である。

歴史展示近世以降のブランチを概括的に説明すると、「藩政をささえたもの」は、秋田の領主と、藩財政の基礎である農業・林業・鉱山業を取り上げている。「生活と文化」は、身分制を表現する人形や、文学作品・書簡などになっている。また、近代は「近代の群像」を除いては、ジオラマ「馬耕から耕うん機へ」をふくめて、ほぼ時間の流れにそった展示をしている。そして、近代はジオラマとブランチの合成でもある。

従って、ブランチで流れに重点をおいた展示は、以下に内容をのべる「新しい時代の動き」である。

これは、佐竹義和の藩政改革の大綱から取り上げ、養老式・廃田再興・林政改革などが展示されている。また、その殖産興業政策に支えられて発展する商品生産、それに伴なう農村の変ぼうがある。さらに、後期に自然と人間の大きなかかわり合いを示す天保の飢饉の様相と、これと関連して生じた天保の一揆を取り上げている。

この一揆の研究は、従来の研究もあるが、さらに県内研究者に研究を委託し、さらに精密な裏付けをえて補強した。

この最後には、自然の変動であった鳥海噴火と象潟地震を取り上げた。

これらは、昭和版秋田県史などの研究成果を基盤としながら、流れを考えたわけだが、ただ商品生産の取り上げ方は、つぎにのべるように、各部門の総合展示であって、展示から受ける印象は、歴史

展示としては異色であり、また、鳥海噴火と象潟地震も、歴史学の論理からみれば、やや異質の感がしないでもない。

②部門の綜合展示

第一展示は綜合展示であり、各部門参加というたてまえをとった。歴史関係では、大まかにいって、工芸部門が「中世の宗教文化」と、近世の「生活と文化」の文化面、同じく「新しい時代の動き」の染色と漆工関係を担当した。また、民俗部門は「藩政をささえたもの」の林業・鉱山業部門と、「生活と文化」の身分制人形、「新しい時代の動き」の養蚕・織物関係、近代の「戦時下の人びと」の人形3体の中2体を担当した。

もちろん、成案までには、何回かの全員討議による検討、または協力体制のもとに展示案が成立した。

この第一展示の構想は、「時の流れ」にそった展示を考えるという大前提のもとに、各部門から、それぞれの時代毎に案が提出された。もともと、部門の綜合化を行なう場合には、各部門の考え方に共通項がなければならない。「時の流れ」がそれに当るわけだが、歴史の場合には、時間帯を精密に限定すればする程、他部門の考え方や参加がずり落ちる結果になる。逆に、歴史以外の他部門の考え方や参加を大きくすると、原則である「時の流れ」が崩れることになる。結局、二律背反の事態に追い込まれ、原則的な「時の流れ」即歴史部門と判断し、他部門は「資料参加」という方法で解決しようとした。

しかし、出来上った展示は、歴史学の論理では包摂できない異質なものがみられる。これは、歴史部門の時代あるいは時期説明の不足や討議の不徹底という方法の問題もある。もっと本質的なことは、それぞれの部門は、それぞれ学的目的や、異なる性格をもっているからである。それを歴史学の論理で統一すること自体、最初から無理な方法であった。こうした「つめ」の甘さを、今反省している。これは綜合化の目的次第にもよるが、各部門の学問性をつきつめてゆけば、綜合化の糸口をつかむことができるのか、また、各部門の学的論理を、一応、捨象して大原則をうち立て、それを部門に帰すか、これからの綜合展示を構成するにしても、しばらく、暗中模索を続けなければならない。

③重層展示—具象資料と抽象資料—

歴史展示は、物（主として文書資料）が多いとか、解説が多いという評価がある。そういう目でみれば、この「新しい時代の動き」も確かに多い方である。たとえば、佐竹義和の藩政改革の理由や施策が解説文であり、天保の一揆の原因・経過・結果も解説文である。これは、あまりにも歴史学主義に考え過ぎて、ポイントを展示資料で提示するという、展示サイドからみると大胆さが欠けていたと思う。

展示の方法については、「展示と歴史学」の項で取り上げたが、ここでは、別の角度からのべよう。

まず、一つのテーマは、殆んどが二つ以上の資料によって構成されている。これは、テーマ、あるいは史実を理解させるためには、もちろん、一つの資料でよい場合もあろうが、多くは角度を変えた複数資料の提示によって、その理解を深めることができる。

また、一般に理解してもらう以上は、単純な視覚に訴えて理解できるもの、すなわち、具象資料を用意しなければならない。しかし、考える資料も提示しないと、展示が浅くなり、高度の学習を要求する人びとは満足をえられないし、また、観覧が一回で終ることにもなる。そうした、ある基礎知識や、思考力を伴なうことによって理解される資料を抽象資料とよぶことにする。

もちろん、資料によっては両者を兼ね備えたものもあるし、同じ資料をみても、深く読み取る人もいるだろう。しかし、ジオラマのように作為したものでない限り、あまり多くはないと思われる。

この具象・抽象の区分は、観覧者の知識や体験によってもその基準が異なるが、展示を構想する場合には、具象・抽象資料の併置展示によって、展示がより完全に近づくと思う。これを重層展示とよぶことにする。

展示作業の経過からみれば、博物館人として馴れない段階では、どうしても、抽象資料を多く選び勝ちである。これは、歴史研究者的発想に基づく資料の選択を行なうからである。しかし、資料の調査・研究を進める中で、具象資料を発見したり、また、気付く考え方が生れたりもする。そうでなければ、県民各層の期待に答えることができないからである。

具体的にいえば、林政改革の山絵図を具象資料として、杉調帳を抽象資料としてとらえた。また、天保の飢饉では、飢饉の絵、飢饉時の食料（レプリカほか）は具象資料であり、葛根配分帳または狂歌や「飲食飽満信士」の戒名などは抽象資料である。このように、まず、視覚でみてとり、考えて確かめることによって、飢饉の全体像が深まることになり、いわゆる、重層展示の役割を果すことになる。

もう一つ付け加えるならば、この飢饉時の食糧案は、最初、葛・百合・わらび・油粕であったが、長谷川伊三郎の「天保凶飢見聞記」の発見によって、食糧製法がわかり、わらび根餅・松皮餅・葛根・とちの実などに変更した。その中、わらび根餅と松皮餅は、その当時と殆んど同じ製法で製作できる人を発見し、現物製作を依頼して、レプリカ展示とした。

この現在の製法者を発見してくれたのは、県内各地域に博物館準備室で依頼した資料収集調査委員であった。調査委員は、各地域に密着して、きめ細かな観察をしているし、人もよく知り抜いている。県の中央部にいる学芸担当は、部分的にはある地域に精通していると思われるが、やはり、それぞれの地元の情報に救われることが多かった。とくに歴史部門にとっては、資料の収集から展示まで、大きな力になったことを付記しておく。

注

①秋田県蔵　享保14年「黒印高帳」
②秋田県史、近世編上「新田開発と農業」
③半田市太郎氏著「近世期における八郎潟周辺漁村」八郎潟　所収
④山口啓二氏著「用水開鑿と鉱山技術」幕藩成立史の研究　所収
⑤「前　同」
⑥十文字町富沢八幡社蔵「指紙」写
⑦十文字町小松兵太郎氏蔵「小松家々歴」
⑧同　　氏蔵「拾五野関御人足遺印覚帳」
⑨「雪出羽路」旧秋田叢書６巻　所収
⑩「前　同」　　同書３巻　所収
⑪「日本民俗事典」
⑫「羽陽秋北水土録」日本経済大典第31巻　所収
⑬「田の神の祭り方」定本柳田国男集13巻　所収
⑭「博物館ディスプレイについて―その体験から」Mouseion No21　所収